大妻女子大学紀要―文系―　第四十二号、二〇一〇年三月

『功名咄』二（上巻ノ下）

江本　裕　編

本稿は東京大学史料編纂所蔵・押小路文庫が所蔵する、写本『功名咄』（三巻六冊）のうちの巻上ノ下を底本として翻刻するものである。詳細な書誌は完結時に記すとして、該書は片仮名漢字混じり本、三巻（上・中・下）六冊、縦二十五・六糎、横十八・四糎。後補書題簽、左肩単辺。序文に「元禄八乙亥歳夷則（七月）下旬／哺盡莽記探西翁之」の署名があるが、探西翁が誰であるかはまだ突きとめていない。今稿に収める上巻ノ下は墨付五十丁半（一七話）。目録はすべて「○○咄」で統一されている。本書は上記押小路文庫蔵以外に、金沢大学附属図書館北条文庫蔵と大洲市立図書館矢野玄道文庫が蔵する。二本とも片仮名漢字混じり本、大洲本は巻下ノ下を欠き、上巻表紙（書題簽）に「堀部彌兵衛著」とある。三本ともほぼ同内容であるが、細部に若干の異同があり、それらを比較するに、三本とも原本とは言えず、三本に遡る祖本があると想定される。他に京都大学附属図書館蔵の『武道摭萃録』二八三・二八四に、『功名咄』下ノ上・下二冊が収録され（平仮名漢字混じり）、また、明治四十一年十月刊『功名咄前編』（川口一雄校正・報行社刊）が『功名咄』上巻を絵入りで翻刻し（ただし底本の四八話に比し八話欠）、国立国会図書館と学習院大学附属図書館（二五～四〇頁落丁）が所蔵している。

今稿の初稿は井高美妃（本学大学院文学研究科修士課程二年次生）が作成し、それを江本が凡例を作成しつつ校閲した。従って最終的な文責は江本にある。当初、江本は、本書が別題の先行書の転写、ないしは抄出ではないかと疑ったが、管見の範囲、独自の武辺咄であるとの結論に達している。順次翻刻を行なって、読者の判断を待つものである。

凡例

一　底本は東京大学史料編纂所・押小路文庫所蔵の『功名咄』（三巻六冊）の「上ノ下」（二冊目）である。

一　翻刻にあたっては原本を忠実に翻字するように努めたが、通読の便を考慮して、概ね次の方針に従った。

1　本文各話に、一・二箇所段落を設けた（底本・他本等とも段落はない）。

2　底本には句読点はないが、私に句読点を施した。なお、闕字に関しては、二字空けに統一した。

3　本文の中で会話体となるべき所、また心中思惟・格言と見なされる場面には「　」を付けた。

4　本文には割書（時には右傍）があるが、当該箇所に〔　〕を付

けて区別した。

5　漢字について

イ　常用漢字にあるものは原則として現在通行の字体に改めた。

ロ　異字体・略字体は原則通常の字体に改め、宛字は正常な文字が想定できるものはそのまま用い、難読のものについては平仮名でルビをつけた。なお原文は、「衛」（数箇所で「エ」と表記）と「類」はすべて「彳」「类」の略体で表記しているが、すべて「衛」・「類」で表記した。

ハ　「篭」と「籠」、「砲」と「炮」は使い分けた。

6　片仮名について

イ　底本は稀に濁点を付し殆どの場合濁点を付していないが、底本のままとした。

ロ　底本に使われている合字「ㄔ・ㄷ・ㄱ・ㄨ」に関しては、それぞれ「トキ・トモ・コト・シテ」と開いた。

7　底本の反復記号は「〻・〻・〻・〻」であるが、これを「〻・〻・〻・〻」とした。

8　振り仮名（ルビ）は、底本は片仮名で付す。翻字にあたっては、底本に付す漢字については片仮名で付し、難読と思われる漢字については、私に平仮名・現代仮名遣いで付した。

9　底本は「レ点・一・二点」を付す場合もあるが、当時の慣用として、付していない場合が多い。原則底本通りとしたが、特例的に私に訓点を施し、その場合は（　）を付した。

10　底本で疑問に思われる表記もそのままに記し、本文の右傍に①②で示し、各話ごとその異同を末尾に、大洲市立図書館矢野玄道文庫本（略号（大））、金沢大学北条文庫（略号（金））で示した。

付記　翻刻を許可された東京大学史料編纂所に、深甚の謝意を表する。

目録（便宜、上巻下だけの目録を付す）

一　岡本咄　　一　小幡咄
一　米村咄　　一　稲継咄
一　猪沼咄　　一　安藤帯刀咄
（一　本多咄）
一　本部咄　　（一）同新左衛門咄
一　加藤肥後守殿咄　　一　松永弾正少弼咄
一　織田信長公咄（ママ）　　一　鯰江咄
一　琢磨咄　　一　八木咄
一　高屋咄　　一　伴咄

（目録に欠けていると思われる咄は括弧で示し、本文で「一つ書き」の章番号を欠く場合は括弧で示した。また内容にふさわしくないと思われる部分にはママを付した）

一　最前モ書付侍ル、熊谷大膳ニ被為賞美弥一右衛門、関ヶ原合戦ノ刻　権現様御旗本横田甚五郎殿方ニ行向テ問ケルハ、「我等若キ者ナリ。何ニテモ功ニ可成事侍ラハ、被有御指南侍レ」ト申ケレハ、甚五郎殿被申ケルハ、「其方ハ若キ人ニ奇持ナル仁カナ。必役ニ立メサルヘキ人ナリ。箇様ノ時ハ、夜モ不寐程ニ心懸レハ、必役ニ立モノナリ」ト宣ヒケル。「心得侍ル」ト云テ罷皈リ、夜モ不寐心懸居タル所ニ、其夜敵方ヨリ、竊盗（シノビ）ノ入ケルニ出会、則討取リ、関ヶ原合戦ノ一番首ニナリタリト云々。

誠ニ、珠モ不用則ハ瓦石ニ同ト、古ヨリ申伝侍。甚五郎殿、如何ニ金言ヲ宣フトモ、弥一右衛門真実ニ受用セスンハ、役ニモ不可立、金言ニモ成マジ。去ハ、仏説ニ、仏ノ御法ハ平等ニノ①差別モナク、一味ノ両②ノ降ル如クナレトモ、受ル草木ニハ千差万別

ノ替有カコトク、仏ノ御法ニハ差別ハナケレトモ、人々ノ差別・賢愚、大小ノ差別ニ依テ、受ル所ニハ又差別アリト被説タリ。武ノ道テ③然リ。能々心ヲ付得悟仕給ヘ。穴賢、油断仕給ナ。

①メ（大・金）。②雨（大・金）。③モ（大・金）。

一

小幡勘兵衛景憲、関ヶ原合戦ノ時分ハ窄人ニテ被居ケルカ、福島左衛門殿手ノ先備、四・五間程先ニ出張シテ、四・五人ニテ備テ被居ケルニ、太夫殿「何者ソ。見苦シ。引退給ヘ」ト被申遣ケレハ、景憲ノ返答ニテ、「引退ト云事ハ嫌フ事ナリ。押付給ヘト」ト云シ故ニ、此返答ニ同シテ備ヲ押付ケレハ、景憲又四・五間程進ミ出ケル。左衛門太夫備ヲ押給ホト進出テ、武者ブリ見事ニ被働ケルト云々。

誠以、景憲ノ返答義ニ当レリト可云。然トモ、始終マテ左有コト、景憲ニハ不足ノ仕様ナルヘシ。左衛門太夫殿、智有ハ一度ハ如右押付給フト云ヘトモ、二度目ヨリハ、使武者ヲ以テ、其方事ヲセントナラハ、我備ノ勢ヲ不借トモ先ヲセラレヨカシ。我勢ヲ不借シテ働ト云ナラハ、我備ヨリ五町モ十町モ先ニテ被働侍レ。見物セン。左ナクシテ、我備ノ五間・七間先ニ立給フハ、我勢ヒヲ借テ被働ニアラスヤ。又我備ノ内ニ立給フト云トモ、鎗前ノ勝負ハ心次第タルヘシ。然ルニ、我備ノ先ニ立テ、我備ヲ①下知ヲ不重見苦シキ為体ハ、曽ハ味方ノ弱リナリ。左有時ハ、味方ニシテ敵ノ方人ト可云者ナリ。同クハ、我軍勢等ク立テ、列ヲ不乱被働侍ラハ、味方威勢有事ナレハ、於我珍重ノ義ナリ。左ナクシテ我意ヲ振舞給ハヽ、味方トハ云セマジ。軍勢申付、鉄炮ニテ打払フヘシ。不教シテ罪スルハ不恵ノ至ナリ。故ニ、相断畢ヌト云遣サハ、景憲理ニ服シテ、備ニ入テ下知ニ可従事必セリ。然時ハ、景憲一往ハ左有モ、二度目ヨリハ備ノ列ニ立、鎗前ニ於テ抽テ可被働者欤。景憲ノ勇ハ真実ナレトモ、形気ノ勇ニ似タリ。此旨能勘弁シ給ヘ。但亦、鎗前一町・二町ニ至テハ、大行ハ不顧、細勤ト云時ハ、大将モ枝葉ノ事ヲ云事ナカレ、一様ニ事ヲ計コトナカレ。

①底本は「備」「ヲ」共に左下に小さく「ヒ」を付す。金は「我カ下知」。大は「我カ下智」。

一

大坂秀頼公ノ近臣大野修理介殿、関ヶ原合戦ノ時節、如何成故ヤランハ不知、常州茨木郡都宮ト云所ニ配流セラレケルニ、関東ニテハ最上陣トテ、諸人打立ケル由。修理殿モ出陣セラルヘ①トテ傍近（アタリ）真言寺ヲ頼テ、吉日ヲ撰給セケルニ、彼僧吉日ヲ見ヲコセケルヲ被見ケルニ、世間ノ忌ケル四筒ノ悪日トテ、第一ニ出行ニ嫌フ日ナリ。修理殿不思儀ノ思ヲナシ、彼寺ニ行テ僧ニ此旨ヲ被問ケルニ、僧ノ云、「去ハコソトヨ、貴殿ニハ此所配所ノ地ナリ。再度此地ニ不皈ヤウニト思所ナリ。故ニ此日ヲヱラミ進セシナリ。直ニ上方ヘ上リ給ヘ」ト云シ。修理殿モ尤ト同シ、出陣セラレケルカ、其如ク大坂ヘ被為皈参ケルトナリ。其以後、関ヶ原合戦有シ時、修理殿モ関東方ニテ有シ武見ニ被出ケルニ、敵一騎ヲ武見ヲ仕廻テ、退給所ヲ慕テ追懸来ル。修理殿ノ草履取、「殿々返シ給ヘ」ト云ケレトモ、修理殿ハ不聞体ニテ静ニ馬ヲ歩セテ退給フ所ニ、彼草リ取、桑ノ木ノ茂リタル蔭ニ隠居テ待懸ケルヲ、敵是ヲ不知ケルカ、見侮リケルカ、修理殿ヲ目懸追来ル所ヲ、フツト出、鐙ヲ揚テ返シケレハ、敵真逆様ニ落タリケルヲ、起モ不立押テ、首ヲ取タリケル。其時修理殿馬ヲ留テ、「世怜目、不入事ヲ」ト云テ、彼草履取ヲ召連、静ニ被退ケルトナリ。其後、彼草リ取被取立、米村権右衛門ト云シカ、大坂陣ノ節ハ修理殿ノ息女ニ被附ケルニ依テ、不為最期供トナリ。故ニ浪人ニテ、彼息女ヲ養育セシカ、年経テ息女病死セラルニ依テ、寛永年中浅野因幡守殿長治ノ応召勤仕シテ、一生ヲ快クセント云々。

右第一真言寺ノ僧、日ヲ撰ケル事、機転利②タル出家ト云ヘシ。修理殿モ此理ニ同シ給フ事、利発第一ト云ヘキモノ欤。扨戦場ニテ武見ニ被出ケルニ、敵付慕ヒケレトモ、不構被退ケル事、惣別

武見ノ習、合戦ノ勝負場ノ善悪ヲモ思量シ、備ノ進退ヲ計。其武見ノ武士ノ謂ニ依テ、勝負有事ナレハ、私ノ働、自ノ高名ヲハ不掛心ニ者ナリ。名聞ヲ思テ働ヲ不忠ノ武士ト云。修理殿此時ノ働、義ニ当テ覚侍ル。去ハ、昔戦国ノ時分、相州小田原北条氏康、関八州ヲ切随ヘシ時、武者修行ニ行者アリ〔此武者修行ニ行シ者ハ、日根備中兄弟也ト云リ〕。氏康戦場ニテ彼者ニ宣フ様、「当家ノ弓矢漸クニ盛也。何国ニモ不恥」ト被仰ケレハ、彼修行者ノ云ク、「当家ノ弓矢未」委ト存ル。其子細ハ、只今武見ニ被遣ケル武士、馬ノ乗ヤウ、武者ブリヲ見事ニ被乗ケルハ、忠義ウスシ」ト被申ケレハ、氏康モ尤ト被同ケルトナリ。故ニ、武見ノ役ヲ相勤ケル時ハ、自ラノ高名ヲハ不掛心ニ、敵ノ進退、戦場ノ善悪ヲ、心静ニ見届テ皈ルヲ第一ノ忠義トス。次ニ又、権右衛門カ働ハ、其身ニ相応シテ、心利タル働ト云ヘシ。智勇有。尤忠義其中ニ有リ。其後、大坂没落以後、志ヲ不変、息女ヲ養育セシ事、戦場ノ働ハ暫時ノ事ナレハ難シテ成安ク、治世ニテ滅亡以後ナレハ、難カ上ノ難、忠臣ト云ヘシ。是等ヲコソ真ジツノ武士トモ、誠ノ忠義トモ可云モノナリ。去ハ末世ノ武士モ、其節ニ当テ可働事専一ナリ。君子中庸、小人ハ反中庸トアリ。

①シ（金、大は「へ」の右下に小さく「シ」）。②利（キ）（金）。

一

関ヶ原合戦ノ時　　権現様御本陣ハ山ニテ少シ高キ地形ナル故、敵見方ノ働無隠見ヘケルトナリ。立花法印御前ニ被居ケル折節、諸手ヨリ戦場ノ武見トシテ一騎ツヽ出ケルニ、立花法印ノ家頼稲継壱岐ト云モノ、指渡四・五尺有ケル金ノ半月ノ指物ニテ、僕従一人ヲ召連テ武見ニ出タリ。然所ニ、敵二騎慕テ烈ク追掛タリ。

権現様御意ニ、アレハ「誰カ者ソ」ト御尋有ケレハ、法印モ吾者ハ知ナカラ、首尾無心元被存ケルニ依テ、不知体ニテ被居ケルトナリ。壱岐ヒタニゲニ逃ケルヤウニ見ヘケルニ　　権現様御意ニハ、「イヤ〳〵馬ノ乗ヤウヲ見ルニ今見ヨ。引返シ勝負ヲスヘシ」ト御意有シニ、法印モカタヅヲ呑テ被見居ケルトナリ。壱岐カ僕源兵衛、「旦那返シ給ヘ」ト云ケレトモ、「不知事ヲ云物カナ。爰ハ返所ニテハ無」ト云テ、ヒタ引ニ引テ、幅ノ一間斗ナル小川ノ有所ヲ越ト等ク取テ返、勝負ヲ仕ケルニ、敵一騎討取タリケレハ、一騎ハ逃ケル所ヲ一町斗追捨テ、首ヲ取テ皈。僕ノ源兵衛ハ其節討死シタリトナリ。戦以後、彼場ニ行テ見ケルニ、「敵ヲ一町斗追タリト覚ケルカ、十四・五間ナラテハ無リシ。セハシキ所ニテハ、遠ク追タルヤウニ覚テモ、少シナラテハナキ間、セハシキ時ニハ左覚ケルカ」ト語シトナリ。其時　　権現様、使番ノ兵ヲ以テ、誰カ者ソ。直ニ首ヲ是ヘ持参可致由ヲ被仰遣ケルニ依テ、直ニ首ヲ奉掛御目候トナリ。其後一生ノ間、彼源兵衛カ忌日ニハ、上下ヲ着シ精進潔斉シテ勤ケルニ、諸人「是ハ如何ン」ト問ケレハ、「今日ハ源兵衛ガ忌日ニテ侍ル間、勤テトラセ侍ル」ト云ケルト也。年経テ肥州島原一揆ヲ起シケル節　　公方様御名代トシテ板倉内膳正殿御目附ニ、石谷十蔵殿被趣ケルニ、西国勢ハ先達島原ノ城下ニ押寄ケレハ、御両使参着ノ由ヲ聞テ、立花左近殿ヨリ彼稲継壱岐ヲ為御案内トテ被出ケル。比ハ寛永十四年丁丑極月上旬ノ事ナルニ、七十有余ノ男ナルカ、裸身ニ具足ヲ着シタリ。例ノ半月ノ指物ヲ被官ニ被持テ、寒キ気色モナク、被官六・七十石①連、馬上ニテ出ケルカ、一騎一町斗乗抜テ云ケルハ、「軍陣ニテ侍ル。下馬御免侍レ」ト云テ、鐙ヲ脱シ鞍ノ前輪ニ手ヲ突、立花左近為御案内出タル由ヲ申ス。御両使先ヘ可参由ヲ被仰ニ依テ、御小屋ニ参。石谷十蔵殿御尋有ケルハ、「貴殿ハ如何成人ソ。見レハ老人ノ角有ル寒ノ内ニ、裸身ニ具足ヲ被着ケルコト不審ナリ」ト被申ケレハ、「是ハ立花左近家頼ニ稲継壱岐ト申ス者ナリ〔此節御名字ヲ被下立花ト号〕。今度御両使ノ御出陣ヲ偏ニ　　公方様ノ御出陣ト存ル所ナリ。年ハ寄候トモ、今度御両使ノ御前ニテ、是非々々討死ト存成テ侍ル。彼半月ノ指物ハ

権現様　　台徳院様被為御覧タル指物ナリ。故ニ指事ハナラ

ネトモ、持セテ参タリ。又若キ時分ヨリ具足着スル度毎ニ、終ニ下着ヲ不着。故ニ年老タレトモ如此ナリ」ト語リケルカ、果シテ二月二十一日ノ夜、城内ヨリ夜討ニ出ケル時討死シタリト云々〔此壱岐、島原記ニハ手負ノ由ニ書付タリ。其手ニテ終ニ死タル者歟。覚束ナシ〕②。

誠以テ、此壱岐ハ剛強ニシテ智謀アリケル武士ト可云モノカ。去ハ関ヶ原合戦ノ時、武見ニ出ケルニ、敵慕テ追懸ケルニ、不構シテ退ケルコト智謀アリ。大体ハ敵味方ノ進退、其場ノ善悪ヲ思量シテ、私ノ働ニハ不掛心事、是古伝ノ法ナリ。然トモ是ハ諸手ヨリ一騎ツヽ出タルコトナリ。其上此所、諸人存ノ前ノ地ナレハ、自ノ高名ヲ遂タルモ、少ハ免ス道理有。又、敵追懸来ニ不構退ケルハ、敵ハ追程敵ノ備ヲ離テ弱ク、吾ハ味方ノ備近ク成程次第ニ強ク、自然ニ敵ヲ討取ニ手間ヲ取時ハ、味方折合ニ安ク、故ニ吾ハ次第ニ強ク、敵ハ益弱シ。此道理有ニ依テ、敵追懸ケレトモ不構、小川ヲ越ケルナルヘシ。又、敵ノ後ニ川有時ハ敵折合難ク、味方ノ地平ナレハ、味方ハ駈付安ク、此道理有ニ依テ、此所ニテ勝負ヲセシ物歟。　権現様御覧シテ勝負ヲスヘシト御意有シハ、馬ノ乗ヤウ定テ敵ノ慕安キヤウニ敵ヲ呼引テ、慕来ハ被討ツヘキヤウニ静ニ退ケルナルヘシ。僕従源兵衛討死ハ下劣ナリトモ、誰カハ劣ルヘキ。主ノ為ニ命ヲ捨ルコト、豈貴賤ノ差別アランヤ。武ノ家ニ生レン者、如此ノ僕従ヲ扶助シテ、一人成トモ召連ナハ、思侭ナル働ヲシテ功ヲモ遂ナン事勿論ナリ。第一勇ニシテ律儀ナル男ニ、常ニ情ヲ掛テ扶助セハ、豈此源兵衛ニ劣ンヤ。又此壱岐カ寒ノ内ナルニ下着ヲ不着、裸身ニ具足ヲ着タル事、別テ常々無病ナル男ニアラズンハ、難成カランカ。乍去、陣中ニテハ下着薄ク、上着厚クト云習アリ。然トモ、我等コトキハ治世ナレハ、終ニ一時ト具足ヲ着タルコトナケレハ、一概ニハ定カタシ。一日着馴タランニハ知ナン者歟。我ト我カ身ノ思量セスンハ有ヘカラス。昔ヨリ教斗ヲ守者ヲハ、法気（ホウケ）ト云テ嫌フコトナリ。能々身ヲ以テ勘弁仕給ヘ。此壱岐ハ股引・脚半ニ至マテ、有ト無トハ無（なき）カ益ナリ。「惣別武者ハ川沼・深田等ヲ渡事度々ナリ。左有時ハ無力益ナリ」ト語リシトナリ。尤ノ儀ナリ。

又天正・元和ノ比ヲヒ、関東ニテ宇都宮ノ家頼ニ黒川舎人ト云者有シカ、武功度々ニテ、感状十七・八持タルモノナリ。此者ノ云ケルハ、「初ノ程ハ小具足迄不残指固メテ出タリシカ、後ニハ胴・冑・小手ノ外ヲ略シヌ。次第々々ニ冑・小手ヲモ捨、ケサンヲモ切捨タリシ」ト語リシトナン〔但是ハ乱後ノ余風ニテ、武士ノ道、別テ行儀・作法不正故カ。スハタ武者ハナラヒアリ〕。誠ニ身軽ナル程身ニ労モナク、働ヨカラン者歟。去レハ昔、鎌倉頼家ノ代ニ、佐々木四郎高綱遁世シテ在シニ、其比何事ニ依テカ山門ヲ責メ給ヒケル事有。佐々木太郎国信カ子何某ト云モノ、討手ノ大将トシテ被指向ケル。彼者高綱カ庵室ニ立寄シニ、暇乞ニ涙ヲ流シケルトナリ。果シテ彼将山門ニテ討死シタリ。以後ニ武者高綱ニ問ケルハ、「彼将討死スヘキコトヲ兼テ知リ給ヒシカ、暇乞ヲセラレケル刻、涙ヲ流サレンコト如何」ト申ケレハ、高綱カ云、「去レハトヨ、兼テ討死ヲセン者ト存テ侍ル。其故ハ山門ハ地形嶮難ノ地ナリ。惣別武士ハ鎧・冑・太刀ニ至ル迄、我力量ヨリハ手軽クスルコト武ノ嗜ナルニ、彼者ノ出立、重鎧・太刀・刀ニ至マテ、寸長ク手重ク見ヘケル間、蒐引モ不自由タルヘシト存ル。左在時ハ、討死疑ナシト存ナシテ侍レハ、不覚涙ノ流レケル」ト語リシト也。是ヲ以テ思時ハ、壱岐カ裸身ニ具足ヲ着セシモ、尤至極セリ。乍去、是等ノ事ハ人々ノ分量ニ依テ凍ユルコト有ヘシ。此所ヲ能々分別セスンハ有ヘカラス。又鎧・冑・太刀・刀ノ事、高綱カ金言ヲ思フト云ヘトモ、何トシテモ丈夫ヲ好事不止。是モ度々事ニ逢時ハ、自ラ知ナンモノナリ。重クシテ利ヲ得シ者ハ重カ善シト云、軽クシテ利ヲ得タル者ハ軽ヲ善トス。兎角大脇指・小脇差ノ利ヲ云ニ等シカランモノ歟。是モ我等コトキノ初心者ハ、中分ノ道理ヲ可用モノナリ。僕従源兵衛カ忌日ニ上下ヲ着シ、精

進潔斉セシコトハ下ノ忠ヲ不忘、志ヲ報スルナルヘシ。覚下ノ志ヲタニ不忘ンハ、増テ君恩ヲ忘レンヤ。是ヲ以テ壱岐カ忠貞ヲ推察スヘシ。

①召（大・金）。②金にはこの傍書なし。

一織田信長公、末①尾州清洲ニ在城シ給フテ、美濃斉藤龍典ト河渡・洲俣ノ辺ニテ数度戦ヒ給ヒシ刻、或②有敵味方入乱戦ヒケルニ、信長公ノ家頼ニ猪沼十左衛門ト云者、河渡河原ニ於テ敵一騎討取、則首ヲ執、馬引寄テ打乗刻、十左衛門カ指物二間ノシナヒヲ指ケルカ、鞍壷ニ乗アマリテ、棹ノ先向ノ地際近ク成ケルヲ、折節敵在合テ棹先ヲ取テ引落ケル故ニ、ソコニテ終ニ被討タリト云々。サレハ、此十左衛門ト云者、武勇剛強ノ者トイヘトモ、指物ノ長キ失ニ依テ討レタルコト残多シ。往昔ノ武士ハ、指物・立物等ヲモ小キヲ用テ、大ナルヲ不好。中比ヨリ武者ブリヲ第一トシテ、形気ヲ好テ手柄次第、大ナルヲ以テ見事ナリト云シ。然トモ、指物・立物大ナル失ハ、自然ニ希ナルコトト思フコトアリ。其故ハ、上杉景勝、伊達政宗ノ両家ノ面々ハ、大形一幅八尺、三幅九尺斗有ケル指物ヲ指タリトナリ。是ヲ以テ思フニ、右両家ノ者、並テ皆刀③量ニモ有ヘカラス。又如何ニ勇ナリトイヘトモ、働ノ障トナツテ敵ニ討レンニハ、右ノゴトク大指物ヲ指事ハ成間ジキヤウニ思所ナリ。去トモ彼両家ノ者トモ大指物ヲ指テ不被苦（本ノマヽ）④事、大形奥州ハ野山多クシテ、嶮難ノ地形希ナリ。此云欤。又別テ夜込・夜討・城責等ニ遠慮有ヘキモノ欤。左アル時ハ小ヲ用ルニ咎ナシ。大ヒナルニハ失多カランモノ欤。此旨能々思量セスンハ、功ヲハ遂ガタカラン。

①未（大・金）。②或の右下傍に小さく「時」（金）。③力（大・金）。④三本とも「本ノマヽ」で共通するが、あるいは「苦」（くるしむ・こまる）か。

一何国ノ御合戦ハ不覚　権現様、安藤帯刀殿ヲ武見ニ被遣ケルニ飯来。　権現様御馬ニ被召ヲ①御坐在ケル二・三間先ニテ被致下馬ケルニ、「惣別武見武者ノ習、下馬スルコトナシ。無作法ニ下馬セシ者ノ云事、可聞ニアラズ。聞ヌ〳〵」ト御意ニテ、御馬ノ手綱ヲ被為引テ脇ヘ御向被成ケル。其時帯刀殿御馬ノ口ニスカリ、「最早下馬仕候上ハ、可仕ヤウナシ」ト云ヘハ　権現様此詞ニ御心解テ、「左有ラハ、様子ヲ語レ。聞ン」トノ御意ナリ。故ニ武見相調ヒ畢ヌ〔此武見ノ事ハ小出大隅守殿ト云リ。是ハ相違ナリ。覚損シケルモノナリ〕。又、駿州持舩（モチフネ）ト云所ニ、武田勝頼幕下向井将監・今福丹後両人楯篭リケルヲ　権現様御出馬有テ御退治被成ケル。武田勝頼後詰②ノ為ニ出張ノ由告来リケレハ、夜中ト云、殊ニ雨降ケレトモ、引退ヘキ旨被仰出所ニ、榊原弐部大輔殿、「今夜ハ誰ニテモ退勝」ト被申ケレハ、夫ヨリ六軍震動、周章騒テ、自然敵出ハ同士討スヘキ体タラク、何ト静ムレトモ不静。其内ニ此帯刀殿、群ニ勝テ早ク物具シテ被出ケレハ　権現様御感有テ、今夜諸軍ノ下知可仕由被仰付タリ。依之帯刀殿駈廻リ下知スレトモ、一円ニ不静時ニ、大久保治郎右衛門殿、在郷ヨリ大竹二本取ヨセ、其ニ大灯燈ヲ二ツ結付高ク上テ、「御旗本ハコヽナリ。武田勝頼ト有無ノ一戦アルヘキ間、其覚悟仕候ヘ」ト相觸ケレハ、依之軍勢静リ、頭々ニ付テ分チケレハ、其ヨリ一備ツヽ、段々引退ケル。覚テヤウ〳〵農③ニ及テ、金谷大井川ノ渡ヨリ一里川下、伊呂ト云所マテ引退給ヒケル。其時漸ク勝頼ノ旗先島田ヘ押来リケル由。依之　権現様ノ御勢ハ危キ命助リタル心地シ、勝頼方ニハ前日島田押詰タランニハ、敵大勢討取ヘキ物ヲト後悔スレトモ、甲斐ソナキ。是ヲ「伊呂ノ退口ノ大事」ト口伝ニ云ヘリ。其後、尾州長久手合戦ニ此帯刀殿、池田勝入ノ首ヲ討取タリトナリ。今来世静謐ニナリテ後、紀伊大納言頼宣公ノ補佐ノ臣ニ被仰付、紀伊国ノ執権ト成テ世ニ云伝ル、金言妙句多シト云々。

サレハ、尾州ノ成瀬隼人殿ト此帯刀殿トヲ、能太夫ノ名人大太夫カ能ト、下妻正心ノ能トニ喩テ云リ。其故ハ、此帯刀殿ハ常ニ詞少クシテ、被言ケル言ニハ世ニ云ヒ伝ルホトノ名言多シ。大太夫カ能モ如此大サワヤカニシテ、希ニ珍敷仕舞ヲスレハ、難忘思フヤウナルコト多シト云リ。尾州ノ成瀬隼人殿、立居ニ金言妙句ヲ被謂ヤウナレドモ、世ニ伝ルホドナル名言希ナリ。下妻正心ノ能モ、立居ニ面白キ仕舞ヲスルヤウニ思ハレケレトモ、世ニ云伝テ賞翫スルコト希ナリ。徳ノ劣リケルニヤト云リ。此帯刀殿ノ金言妙句④数多依有之テ、畧之。

誠以、此帯刀殿、才智世ニ希ナル人欤。過テ下馬セシ事ハ、後ニ馬ニ乗タレハトテ可皈ニアラス。左有ハ先武見ノ用ヲ勤テ、重テハ下馬セマシキ迄ヨト思テ覚ハ云タルヘシ。　権現様モ此道理ニ服シ給テ、被成御聞タルナルヘシ。名将ニアラスンハ、覚早束ニ被成御聞間ジ。主従ノ戯レ面白シ。持舩ノ節、群ニ勝レモノ早キモ、常々心懸ナクンハ周章ナラン。其後ハ大久保殿ノ才智抜群ト云ヘキモノ欤。榊原殿下知ハ、時ニ依テ如此ノ下知モ有トハ云ヘト、是ハ長キ箱ニ円キ蓋仕タル譬ニ相似タリ。小智ハ菩提ノ妨トハ能云ヘル言葉ナリ。九思一言、猶以軍陣ニテ可用事、肝要ナリ。去ハ昔新田義宗、同義治・同義興、義兵ヲ越ン⑤尊氏将軍ト笛吹峠ニテ対陣セシ夜、新田方ニ猿賢キ武士有テ云出シケルハ、「味方ノ篝火ノ火蔭ヲ見ルニ、細ク長ク根弱ク焼ルハ、是敗軍ノ瑞相ナリ」ト云出ケレハ、心臆シタル弱者トモ、一人私語二人私語、後ニハ陣中色メイテ一軍敗シケレハ、是ヲ疑テ二軍敗シ、軍々数多敗レケレハ、残ル軍勢モ無詮コトニ思テ不成心、惣敗軍ト成タル様メシアリ。是誠ニ時節到来、運ノ極メトハ云ナカラ、臆病者不智恵成者ハ、味方ノ足マトヒト成事、味方ヲモ可恐事欤。軍陣ニ於テ有言ノ大事、無言ノ大事ト云習アリ。仮ニモ敵ヲ美ヲ談スルコトナカレ。仮初ニモ味方ノ凶ヲ告ルコト有ヘカラスト也。可恐可慎。又武見ニモ右ノ習有事アリ。長久手合戦ノ時、池田勝入ノ首ヲ被討取ケルコト、武ノ冥加トハ云。武勇ナクンハ成ヘカラス。去レハ、世ニ過テル事アリ。果報ハ寐テ待テト云コトアリ。是ハ己ヲ尽シ、運ヲハ天ニマカセヨト云事ナルソ。悪シク心得テハ、徒ラニ油断セシ人多シ。喩ハ敵競来ニ、運次第ト云テ、寐テハ居レマジ。戦テコソ勝負ハ運ニマカセ度事ナレ。武ノ冥加モ心ヲ剛強ニ以テ稼ヲコソ、冥加モ有ヘケレ。昼夜安楽ヲ事トシ、油断シテハ武ノ冥加心元ナシ。其後、世静謐ニシテ頼宣公ノ補佐ノ臣ト成事、智ナクンハ成ヘカラス。其上、金言妙句世ニ言伝テ賞美セラレ給フコト、武ノ冥加此外ニ何カアランヤ。人ハ一言ニテモ知ラル、トハ是等ノ事ヲヤ可申。

①三本共通して「ヲ」であるが、金が「ヲ」と記したあと、「テ」と訂正。②三本とも「誥」であるが「詰」の誤り（以下は略）。③晨（大・金）。④句（大・金）。⑤ニ（大）、シ（金）。

一

尾州長久手合戦ノトキ、　権現様御家頼本多八蔵ト云シモノ、森武蔵守殿ヲ討取テ、鼻ヲソギテ印ニ腰ニ指シ給ヒケル。サスカヲ添テ取テ来ケルカ、年来清州ノ城下ニ居住シケル白銀屋ノ何某是ヲ見テ、「此サスカハ疑モナク森武蔵守殿ノサスガナリ。先年、武蔵守殿ヨリ御誂ニテ、我等ノ拵ヘ申タルサスガナリ」ト云ヘハ、「扨ハ武蔵守殿ニテ有ケル者ヲ、左有ハ鼻ヲソガストモ首ヲ可取者ヲ」ト思ヒテ、其辺ニテ不知首ヲ一ツ取テサスカヲソヘテ御実検ノ場へ持参シテ、「森武蔵守殿ノ首ナリ」ト云ヲ、実検ニ逢タリケル折節、御前ニ年久敷武蔵守殿ニ勤仕セシ医者、近曽（サイツコロ）ヨリ御近習ニ相語ケルカ、是ヲ見テ武蔵守殿ニテハ無御坐由ヲ云ケル間、御近習ノ者トモ是ヲ聞テ一度ニ咄（どつと）ト笑ケル。本多八蔵、面目ヲ失テ退出ス。故ニ此事ヲ恥敷事ニ思ヒテ、其以後蟹江ノ城攻ニ討死ソシタリト云々。

誠ニ、此本多八蔵、勇剛ノ武士ナリト云ヘトモ、飾ル心有ニ依テ此恥ヲ受タルモノナリ。真直ニ戦場セハシキ故ニ、鼻ヲソキ此サ

スガヲ取ソヘテ持来ケレハ、白銀屋ノ何某ト云モノ、無疑武蔵守殿ニテ可有由申侍ル。御詮儀被成侍レト云ハ、武蔵守殿ニテ無ト云トモ、八蔵カ僻言ニハ成間シキ者ヲ、真ノ作首ニ成タルコト、飾心有シ神罰タルヘシ。然トモ、此事ヲ恥敷事ニ思テ、蟹江ノ城責ニ討死シタルハ、誠ニ能死タリ。是ヲ以テ思時ハ、真実ニ諸飾タル武士ニハ有ヘカラス。時ニ当テフト迷タルナルヘシ。真実ヨリ、諂飾タル武士ナラハ、此事ヲ恥、討死ヲハセマジキモノ歟。討死ヲシタルニ依テ、本多ノ名字ト其子孫トハ潔キ心有。討死ヲセス生テアランニハ、口ニテ何ト云タリトモ、作首ノ恥ハ難遁カランモノカ。去ハ、甲州武田ノ家頼、土屋右衛門尉ト云ケルモノ、コトバニ、「戦場ニ於テ手柄・不手柄、武士ニハ証拠ハ入間シキモノナリ」ト被言シトカヤ。誠以テ、武士ハ剛強清潔ヲ第一ト嗜ケル者ノ、何ソ偽ヲ可言ヤ。偽ヲ不言ハ、証拠ハ別ニ入間シキ者ナリ。此土屋右衛門尉カ心ノ剛強清潔ナルコト推量セラレテ、今以テ感信スル所ナリ。此旨、能々思量ヲハシマセ。

一

堀尾帯刀殿、雲州被為治国ケル比、家頼ニ本部五左衛門ト云モノアリ。或時、傍輩大勢寄合饗応ノ折節、不慮ニ口論ヲ仕出シケルニ、相手ノ何某雑言ヲ吐テ、最早堪忍モ難成様子ニ成行ケレトモ、列坐ノ面々双方ヲ宥メ、則中和ノ盃ヲ取替スヘキ由、達テ云ケルニ依テ、五左衛門、堪忍難成悪口セラレケレトモ、迚モ討果スコト難成坐席ナルニ依テ、見合テ有ケルニ、則面々ノ前ニ在ケル盃ヲ互ニ遣スヘキ旨、坐中言ケル間、五左衛門兎角ヲ不言盃ヲ相手ノ何某ニ指タリケルヲ、呑ヨシシテ不呑指置タリ。五左衛門是ヲ見テ、「是非一盃ハ参リ侍レ。我等酌仕ラン」ト云テ、是ヲシホヲ①指違ントセシヲ、坐中此色ヲ察シテ立タセズ。又向ノ盃ヲ五左衛門ニ指タリケルヲ、是モ呑ヨシシテ置ヌ。其時、相手ノ何某「肴仕ラン」ト云テ、其コロ時花（ハヤリ）ケル小歌ニ「迚モ成マヒモノ故ニ、思ヒキラフヤレ戀ノ道」ト云小歌ノ有ケルヲ謡ケル。五左衛門イヨ〳〵鬱憤不止思ヒケレトモ、兎角討果サセサリケレハ、堪忍シテ居タリ。扨膳モ取レテ以後、庭ニ出ル由シテ障子ヲ明テ立出、跡ノ障子ヲ指塞キ、押ハダ脱テ脇指腹ニ突立、相手ノ何某殿、「先ノ小歌ニ迚モ成マヒトアリシカ、成カ成マイカ、腹切テ指侍ル気ハ少モ違ヒ不侍」ト云ヘハ、坐中ノ面々、驚キ騒キ障子ヲ明テ飛出テ見ルニ、早腹一文字ニ掻切ヌ。坐中ノ面々可為ヤウナクシテ介錯ヲシタリ。故ニ彼相手ノ何某モ是非ナク切腹シタリト云々。誠ニ、時ニ当テ面目ヲ失フ時ハ、唐土ハ不知、日本ノ武士ハ死スルヲ以テ善トス。然ル所ニ、五左衛門面目ヲ失トイヘトモ、大勢列坐シテ迚モ討果スコト難成様子ニ依テ、雑言ヲ不吐ノ堪忍セシコト、尤至極セリ。去ハ、相手堪忍スレハトテ雑言ヲ吐ハ、善人ノ不為事ナリ。善人ハ断ルヘキ道理有時ハ、其事ヲ断リ雑言ヲ不吐トナリ。又討果スヘキ道理有時ハ、雑言ヲハ不吐トモ討果スモノナリ。然ルニ此五左衛門、大勢列坐ト云ヒ、殊ニ討果サセ間敷様子ナルニ依テ、悪口ヲモ不為堪忍セシヲ不知シテ、臆セシト思ヒ覚言ヒシコト、不覚者ノ骨頂（コッチャウ）タルヘシ。殊ニ肴ニ気ニ当ル如クナル小歌ヲ謡フコト、態（ワザ）トニモ童ハシクシテ悪シ。又気ノ不付ノ謡フナラハ、猶以勢虚（ウツケ）ト云ヘシ。五左衛門カ腹切テ指タルハ、時ニ当テ不遁所ナレハ、是非ヲ云ニ不及。定テ以後トテモ、討果スコト難成カラン事ヲ思量スル歟。左有時ハ、腹切テ指事尤ノ儀ナリ。サラハ腹ヲ切テ指タルニ、兎角ニ事ヲ寄テ腹ヲ不切ハ、其指サレシ人ノ比興ナリ。喩ハ兎角ニ事ヲヨセテ、武士ヲモヨセ、町人・百姓、又ハ出家・比丘尼ニモ成カシ。指、スル②方ニ構ヘキ道理ナシ。唯腹ヲ切指テ恥辱ヲス、ギタルマデナリ。又腹ヲ切サ、レシ人ハ、腹切テ返スヨリ外ノ道ナシ。我常々思フ事アリ。五左衛門カゴトク腹切テ指者アラハ、扨々是非ヲ云ヘキヤウナシ。大事ノ腹切テ指給フヲ、此方ニ片時モ預リ置ヘキニ非ス。「貴殿ノ御目ノ前テ腹切テ見セ申サン。介錯ヲ少待給ヘ」ト云テ、押膚脱テ腹切テ、「是見給ヘヤ。貴殿ニ少モ不可劣」ト云度モノナリ。

書置・遺言ナトモ六ケ敷、誰カ当坐ノ喧嘩ニ書置・遺言セシ者ヤ有。腹切テ指サレタランニハ、当坐ノ喧嘩ト観念シテ如此セハ、一際潔ヨカランモノ欤。但シ是ハ治世ノ格ナリ。伝聞乱世ノ時分ハ、如何ホト時面ヲ闕事有トモ討果スト云コトヲセズ、「追付戦場ニ於テ可申合」ト云テ、先ヲ争ヒ死ヲ争ヒシトカヤ。誠以テ忠義第一ト可言モノカ。治世ナレドモ、後日ニ恥辱ヲス、グヘキ道理アル時ハ、当坐諸人ニ嘲弄セラル、ク③少モ悔思フヘカラス。此旨能不可有不為分別。

①ニ（大・金）。②底本「指、する」、「指ヌル」（大・金）。③ヲ（大・金）。

（一）加藤肥後守清正、九州肥後国被為領知、其男相継シテ肥後守殿ト云テ不相替被為領知ケルニ、子細アツテ、於江戸出羽国ニ配流セラル。其節肥後守殿家頼ニ本部新左衛門ト云モノ、豊後鶴崎ヨリ熊本海道ノ堺目、九町ノ城被預置ケルニ、江戸ヨリ肥後守殿配流セラレ、肥後ノ国請取ニ、稲葉丹後守殿被仰付ケル由告来ケルニ、熊本ニテ家中ノ面々動転不少、思々心々ニシテ家老トモ寄合々々詮儀スレトモ、一円ニ思定タル儀モナシ。扨本部新左衛門方ヘ使者ヲ遣シ、城下ヘ被参候ヘ。相談スヘキ儀有之由云遣シケルニ、新左衛門返答シテ云ク、其許ヘ参リ相談スヘキ儀不侍。参間敷シキ由返答ス。使ニ一①度ニ及ケレハ、新左衛門侍二人ニ申付、熊本ヘ申遣シケルハ「其許ニハ如何様ニ被成候トモ、我等儀ハ於此城テハ肥後守殿ヨリ城可相渡候トノ墨付不参ニ於テハ、城相渡申間敷候。其許ニハ如何様トモ、御分別次第タルヘシ」ト云遣シケル。扨使ノ者ニ云含メケルハ、「定テ詮儀マチ〳〵ニテ返答延引スヘシ。左アラハ云捨テ皈ルヘシ。返事不聞トモ不苦」ト云遣シケル。如案明ル日迄相待ケレトモ返答ナシ。故ニ使者ハ云捨テ皈ス②。新左衛門カ云ク、「扨コソ申サスカ、熊本ハ兎モアレ角モアレ、於此城墨付不来ハ渡間シキ」ト云テ、鶴崎ヨリノ海道ヲ堀切・竹束ヲ付、柵木ヲフリ逆茂木ヲ附、要害ヲ拵、篭城ノ用意専ラナリケル間、熊本ニテ漸々一列シテ篭城ノ覚悟ニハ成タルヨシ。此事九州ニ隠レナカリシカハ、方々ヨリ江戸ヘ注進有シカハ、肥後守殿ヨリ相渡スヘキ由ノ判形ヲトリ、持参ナサレケル。新左衛門ハ素ヨリ鶴崎ヨリノ海道ノ堀切・逆茂木ヲ引、竹束ヲ附、鉄炮ヲ伏、軍勢ヲ備テ待居ル所ニ、其時ノ御目附何某殿ヨリ、先ヘ御使者ヲ以テ被仰遣ケルハ、「肥後守殿ヨリノ墨付ナクンハ城被相渡間敷由、尤可左有儀ナリ。如何モ肥後守殿墨付持参セシマ、見セ可申。城相渡サレ候ヘ」トナリ。其時新左衛門返事シテ云ク、肥後守殿ヨリシテ墨付御持参ノ上ハ、兎角ニ及ヒ不申。其墨付是ヘ御見セ候上ハ、兎モ角モ御意ニ可随ヨシナリ。故ニ肥後守殿ヨリノ判形ヲ被遣ケレハ、胄ヲ脱テ判形ヲ戴謹テ拝見シ、此上ハ可申様ナシ。併少シ御待候ヘ。道ノ逆茂木以下、取退掃除仕リ、城相渡可申由ヲ云テ、道橋以下迄モ掃除シテ城明渡シ、我預リノ同心・被官ノ妻子以下ヲ先ニ押立、甲胄・弓箭ヲ帯シテ、静ニ城下ヲ押退ケルトナリ。此新左衛門ハ大坂両陣トモニ高名ヲ遂タリシ者ナリト云々。

誠ニ以テ、智勇兼備シタル男ト云ヘシ。我主人浪人トナリ給ト聞テモ尤不騒、我カ預リシ侍トモニモ常々義有ノ道ヲ云聞セタルニ依テ不騒、其主人ヨリ墨付不来シテハ被渡間敷道理ヲ思ヒ、城ノ要害ヲ拵ヘ相待ケルニ依テ、此事九州ニ隠ナク、江戸ヘモ方々ヨリ注進アリシニ依テ、肥後守殿ノ判形ヲ持参セラレケルモノナリ。扨亦、是非トモニ篭城スヘキ道理ニモナケレハ、墨付頂戴シテ城ヲ明渡シタリ。是コソ義有テ智有ト云ヘシ。熊本ノ家老共ハ此新左衛門ニ被引テ、不心成義有ヤウ也。義ニ依テ命ヲ軽ンスルコトハ、和漢トモニ武ノ本意トスル所ナリ。去ハ、武士ハ常々ニ生死ノ二ヲ守テコソ善事ナルニ、不断遊山・翫水ニテ日ヲ暮ス。仮ニモ義有道、忠勇智ノ道理ヲ詮儀ナク寄合テハ、料理献立ノ善悪斗ニ心ヲ入テハ、角有時節ニ当惑スルコト尤ナリ。去ル寛文ノ比、

丹州宮津ノ城主京極高国、江戸ニテ流罪セラレシ時、城請取ニ二・三頭被趣ケルニ、宮津ノ家老并ニ侍共、思々心々ニシテ、或ハ篭城ト云者モアリ、或ハ篭城シテハ天下ヘ弓ヲ引ニ成ス③、天下ヘ弓ヲ引道理ナシト云者アリ。常々辛キ宛行（カラあてがい）ニテ有シ間、篭城スヘキヤウナシト云者モ有。一円ニ思ヒ不定、家中三ツ四ツニ成シトカヤ。扨、宮津家老共方ヨリ江州草津マテ使者ヲ以テ云ケルハ、「丹後守方ヨリ下知ナクハ渡ス間敷」トテ篭城仕候。「一ハ天下ヘ弓ヲ引ニ成侍ル。丹後守ニ預ケラレシ城ヲ、丹後守下知ナクシテ相渡申事モ難成存候。唯御慈悲ニ丹後守墨付御持参被遊被下侍レカシ」ト云遣シケレハ、青山大膳殿ノ返答ニ、「宮津家老共ニ城相渡候トモ、又ハ篭城仕候トモ、其方トモ分別次第ナリ」トアル。又宮津ノ侍トモ三十人斗云合、草津辺マテ出迎ヒ、宮津ヘノ案内可仕由云ケレハ、「此方ニハ案内者入不侍。先ヘ疾々参候テ篭城仕候ヘ。早速押詰踏ツブシ可申者ナリ」ト云テ、恥辱ヲ与ヘラレケレハ、宮津ヘ可皈ヤウモナク、其ヨリ散々ニ成ス④トカヤ。扨、宮津ヘ打入給フニ、宮津ノ城ノ玄関ノ前ニ、家老ノ面々四・五人並居テ云ケルハ、「今度丹後守配流ニ付テ、此城丹後守ヨリ相渡候ヘトノ下知ナシ。左云テ篭城仕候ヘハ、天下ヘ対シ弓ヲ引ニ成侍ル。所詮爰ニテ我等トモ切腹仕候ヨリ外ナシ」ト云ケレハ、其時、「丹後守殿ノ墨付アリ。是見給ヘ」ト被云シトナリ。コレト新左衛門カ仕様トハ雲泥万里ノ違ナリ。喩ハ宮津ノ城、丹後守殿墨付於不被越ハ不可相渡ト云テ、方々ノ口々ニ要害ヲ拵ヘ、鉄炮ヲ備テ相待ナラハ、不可有隠（かくれ）。左有時、墨付不持参シテ不叶義ナリ。自然剛気ヲ以テ城ヲ請取ト云ハヽ、一人成共本城ニ火ヲ掛、腹切タランニハ、城ヲ渡タルニハ不可有。勿論城ヲ請取タルト云ヘカラス。宮津ノ家老共ハ不智ニテ忠義有体ニモテナシ、人ヲ誑スニ依テ、人是ヲ知レリ。心ニ義ヲ不思、不実ナル天罰ナルヘシ。義ヲ金石ニ類シ、義ニ依テ命ヲ捨ルコトハ、鵝毛ヨリモ軽クスヘシ。如此忠義ヲ思フ時ハ、新左衛門カ如ク、不求シテ其名高カルヘシ。

①底本は「ニ一」とあるが、大・金共に「三」。②ヌ（金）。③ヌ（大・金）。④ヌ（大・金）。

一

加藤肥後守殿未若年ノ時分ハ、加藤虎之助ト云テ、羽柴筑前守殿ノ御供ニ被参ルル時、腰掛ニ大勢并居ケル中ニテ供ノ者トモ、「我ハ知行三百石取タシ。或ハ五百石取タシ」ナトヽ、思ヒ〳〵心々ニ云ケル内ニ、虎之助ハ何トモ不謂シテ有シニ、或人、「扨虎之助如何ホト取度思フソ」ト問ケレハ、虎之助云ク、「各様ノ如ク、我等少気ニハ不侍。其故ハ、天下ニ誰有ン筑前殿ヲ主ニ持侍ル。又年ハ未二十ニ不足モノナリ。去ハ仕合次第、行々ハ国主ニモナルヘキト思フ所ナリ」ト云ケレハ、皆手ヲ拍テ笑者多シ。其中ニ一人ノ侍云ケルヤウ、「扨々、虎之助殿ノ云分ハ道理至極セリ。年ハ若シ主ハ誰ラ①ン筑前殿ナリ。心懸・器量次第ニ国主ニモ成間敷ヤウナシ。自然、貴殿仕合能国主ニ成給ハヽ、必可頼入間、ワスレ給フナ。扨々御心底感入侍ル」トイヘハ、「尤ナリ」ト云モノモアリ。又、「何カ虎之助ノ分トシテ、ヲカシキコトヲ云ヲ、真顔ニ成テ感スルモ、同ヤウナル惛（ホレ）者ナリ」ト笑者ノミナリ。年経テ肥後一国領地セラレケル比、彼侍肥後ニ下リ、先年角有事アリシモノナリ。故ニ今度罷下リシ由、云上タリシニ、折節清正馬ヲ責サセ見居給ヒケルカ、「如何ニモ其段、能覚テ侍ル。被致登城候ヘ。可入見参」トナリ。扨彼侍ヲ饗応仕給コト、珍客ノ如ク終日古今ノ物語シテ、黄昏ニ及テ町屋ニ皈ヌ。其跡ヨリ使者ヲ以云遣サレケルハ、「何方ヘモ御志ナク、我ラ所ニ堪忍被致候ハヽ、知行五百石可進。於御同心テハ、明日被致登城侍レ」トナリ。彼侍同心ス。故ニ明ル日登城シテ折紙拝領後ハ、又家中ノ侍同前ノ挨拶ナリトイヘリ。此清正、如此大気ニシテ、勇壮ナルコト珍敷人ナリト云ヘリ。去ハ、秀吉公ノ御供シテ出陣セラレケル節、毎モ清正ノ指給ヒケル刀、左文字ノ大幅ニテ丈夫ナリケル

刀カナルヲ抜給フテ、是ヲ、御内ノ者ニ「刃ハヒケヌカ、見ヨ」ト被申ケルニ、見テ、「如何ニモヒケハ仕リ不侍」ト云ヘハ、請取給ヒテ被謂ケルハ、「今日又此刀ニテ、何等ノ人ヲカ可殺」ト宣フ。是ヲ聞者毎ニ、御内ノ者マテモ、身ノ毛モ余立テ冷敷思フ如ク、勇壮ニ剛強ナル人ニテ在シ由、謂伝テ侍ルモノナリ。

誠ニ、此清正剛勢成コト、大唐マテモ無隠。如此大気ニシテ、殊強成事、武家ニハ羨敷モノナリ。然トモ、秀吉公ト云名将ヲ後ニ立テスンハ、危カルヘシ。其故ハ、刀ノ刃バカリニテハ折砕テ、物ノ骨ヲ切事不成カ如ク、如何ニ剛勢ナリト云ヘトモ、味方毎度敗軍ノミセンニハ、終ニハ討死スヘシ。秀吉公智謀御坐有シニ依テ、清正当ル所ニ利アラスト云コトナシ。然トモ、清正智謀ナキニシモアラス。一円ニ智謀ナクンハ、秀吉公又清正ヲ将トハ不為。秀吉公名将ナレハ、知人如指掌。是ヲ以思量仕給ヘ。清正ニ智謀有事ヲ、又彼侍肥後ニ下向シケルトキ、珍客ノ如ク饗応給ヒ、終日古今ノ物語リシテ彼侍ノ心根ヲ弥推察シテ、以後知行ヲ可給由被申シモ、尤至極セリ。大国ヲ領スレハトテ、無詮者ヲ扶助センハ亡国ノ基タルヘシ。又カノ侍モ一度被召抱テ被召放ナハ、無愛儀ナルヘシ。珍客ノ如ク饗応給テ其器量ヲ察シ、其上ニテ被召抱トモ、又ハ被皈給フトモ、尤善カルヘシ。清正、此道理ニヨツテ覚セラレケルカ。兎角ニ清正ハ英雄ノ武士ト云ヘシ。去ハ、誰レモ軍陣ニ臨テハ、此清正ノコトク勇壮ノ心ヲ励スヘキモノカ。誰カ百年ノ命ヲ保ツ。古歌ニモ、

明日アリト思フ心ノアダ桜夜半ノ嵐ニ吹ヌモノカハ

角有無常ノ身ヲ惜ムコト、愚癡ノ至ナリ。左イヘハトテ、徒ラニ死センハ義ニアラス。唯忠義ノ為ニ可惜シテ捨ヨト云コトナリ。

①「ラ」の前に「ア」(金)、「ラの前右傍に小さく「有」(大)。

一 松永弾正少弼久秀ト云シ人ハ、若輩ノ比ハ下賤ニテ有シトカヤ。其時分、何事ヤラン、京都ヨリ摂州ヘ譜請有テ、長柄ノ者百人下リケルニ、久秀モ其内ニテ下リシニ、山崎ニ一宿シタリシ夜、宵ヨリ寐タル者モアリ。又炉ノ際ニ寄居テ、亭主ト物語リシテ居モアリ。久秀モ炉ノ際ニテ物語リシテ皆寐タル。依テ我モ寐侍ルヘシ、何ニテモ枕ニ成ヘキ物ヲハ皆取テ寐タルニ依テ、枕ニ成ヘキ物ナシ。「此枡ニテモ枕ニシテ寐給ヘ」ト云ケレハ、久秀言ケルハ、「喩ヒ今宵枕ナシニ寐侍ルトモ、枡ヲ枕ニスルコトハイヤ」ト云ケル。亭主是ヲ聞テ、「扨々是ハ如何成義ニテ、枡ヲハ枕ニスルコトイヤト宣ヒケルソヤ。不審ニヲモヒ侍ル」ト云ヘハ、久秀云ク、「去レハ枡ヲ枕ニスルト、千人ヨリ上ノ扶持ヲスルコト不成由云伝テ侍ル。其故ニ枕ニセス」ト云タリケレハ、亭主打笑テ云ケルハ、「其方ハ今長柄ノ者ノ分トシテ、千人ノ者ノ頭ニ成給ヘハ能侍ル。ヲカシキコトヲ宣フ物カナ」ト云ヘハ、「如何ニモ亭主ノ云分尤ナレトモ、又大身ニ成間敷義ニモ不侍。其故ハ、我世上ヲ下墨(サケスミ)テ見ルニ、彼家ハ覚亡ヒナン。此家ハ今年ノ内ニ此ノ如ク栄ナント思フ所、十ノ内七・八ツ程ハ我等カ下墨当リ侍ル程ニ、智ナキニシモアラス。左有時ハ精次第、仕合次第、大身ニ成マシキ身ニモ不侍」トイヘハ、亭主一々(ツク〳〵)ト聞テ、「如何道理至極シ侍ル。扨々御心底感シ入シモノナリ。自然大身ニ成給フコトアラハ、知行二百石給ヒ候ヘ」ト云ヘハ、夫ハ今ヨリ約束成間敷ヨシ云ケレトモ、「是非々々」ト被責テ、「左有ハ可遣」ト云ケル。其時亭主、「左ヤウ候ハ、一筆ヲ給ヘ候ヘ」ト云ヘハ、「一筆ニ不及」ト云ケレトモ、「是非トモ」ト所望シケレハ、則書テ遣シケル。亭主戴キ、サラハ明朝御出立ヲ祝ヒ可申由ヲ云テ、馳走シテ下シヌ。摂州ノ普請仕舞テ上リケル時ハ、早長柄百人ノ頭ト成テ上リス①。彼山崎ノ亭主イヨ〳〵馳走シテ、後ニハ親類ノコトクムツマシカリシト也。其後、三好長慶ノ祐筆トナリシ時分、諸人久秀ヲ嫉ミケルカ、奈良ノ町ヲ通リケルニ、二階ノ上ヨリ小便ヲ仕カケ、ルヲ、不知体ニモテナシ、「何徒者ソ。水ヲカケヌル」ト云テ通リヌ。其以後、大和一国ノ主トナツテ、彼者ヲ召捕テ成

敗シタリトカヤ。彼山崎ノ亭主、右ノ書付ヲ以テ参リケレハ対面シテ、其約束ノ如ク米二百石ツヽ、毎年山崎ヘ遣シケルトナリ。然トモ、此久秀剛強ノミニシテ仁義ノ道ヲ不嗜。或ハ主ノ三好殿ヲ毒害シテ奉殺。又、南部多門ノ城ヲ城（きず）ヒテ、大仏殿カ城ノ為ニ悪敷トテ、大仏殿ヲ焼ント云シ時、或人仏閣ヲ焼者、後世ニ火ノ柱ヲ抱ト申侍ル」ト云ヘハ、鍬ヲ三枚焼テ脇ノ下ニ当、「是程ナラハ不苦、堪忍可成、焼ケ」ト云テ、大仏殿ヲ焼シトカヤ。勿論、大和一国ノ困究不斜ト。或時志賀ノ城ヲ城ヒテ、兵粮ハ不及申、塩テ・魚・海草・油等マテ篭置、自慢ニテヤ有ケン、此城ニ何ニテモ不足ナリト思フ事アラハ可申出。可任其方②由札ヲ書テ立タリケレハ、何者欤、此札ニ漆③書シテ云ク、「是程ニ一国ノ民困究シテハ、運命不足ナルヘシ」ト、「天運ヲ御用意アルヘシ」ト書タリケルトカヤ。又或時　権現様上方ヘ被為上ケルトキ、信長公ノ御前ヘ白髪ノ老人出仕シタリケルニ　権現様御見知リ不被成シテ、「アレハ何者ニテ侍ル」ト信長公ヘ御尋アリシニ、信長公、「彼コソ主ノ三好ヲ毒害シ、大仏殿ノ④焼シ大悪人ノ松永弾正ニテ侍ル」ト宣ヒケレハ、弾正赤面シテ、俯（うつむき）テ居タリケルニ、頭ヨリ煙ノ立コト炎ノ如ナリシトカヤ。是ヨリ信長公ヲ恨、謀叛シテ終亡ヒタリ云リ⑤。去ハ、最期ニ志賀ノ城ニ篭リ、敵寄来ル時、寄手ヲ呼カケ、「是コソ常々所望ナリシ天下ノ名物平蛛ト云釜ナリ」ト云テ、塀ヨリ外ヘ擲出シケレハ、散々ニ砕ケル。扨久秀、子息ノ何某ヲ近ケ、「汝天主ヨリ飛テ見ヨ」ト被云ケルニ、「天守ヨリ飛タランニハ定テ微塵ニ成ヘシ。トテモ遁レヌ所ナリ。御一所ニ自殺セン」ト云ケレハ、久秀、「其義ニ非ス。松永是程マテニ謀ヲ残シタレトモ、天運尽ス⑥レハ不及是非ト、世上ニ云セン為ナリ」ト云テ飛セ、久秀ハ合戦ニモ不構、碁ヲ打テ居ケルカ、「敵追手ノ木戸ヲ責敗テ乱入侍ル」トイヘハ、是ヲ聞テ、最騒タル気色モナク、腹掻切テ亡ヒヌト云々。

此久秀ハ、大気ニシテ勇智有ケレトモ、道ノ心ナキ故、主ヲ害シ仏閣ヲ焼、民ヲ撫育ノ心ナクシテ、大和一国悉ク困究シタリ。サレハ、此過失アリシ故ニ、信長公恥辱ヲ与ヘラレケンモノナリ。去ハ此久秀、信長公ニ従フト云ヘトモ、真実ノ皈服ニアラス。信長公強大ニ成タマフニ依テ、不成心皈服セシモノカ。此故ニ、信長公兼テ皈服ヲ不喜思ヒタマヒ、如此宣ヒケルカ。又信長公ノ宣ヒシモ、善ニハアラス。人ニ非有ハトテ、如此無愛云放ハ不仁ナリ。神霊ハ無（アンキ）レ道（ナシ）ト嫌ヒ給フ故ニ、信長公モ天下ヲ治ルノ器ニアラス。此御心故、終ニハ害ニアヒ給フト見ヘタリ。大将ハ一人ヲ戒メテ万人恥ル如クシ、一度怒テ万人恐ル、如シ給フベキモノナリ。又平蛛ト云釜モ天下ノ名物ナリ。喩信長公取給ヒタリトモ、信長公モ命ニ極リ有レハ、信長公一人ノ重宝ニモ成間敷。永ク天下ノ宝ヲ徒ラニ滅スルコト、不仁ノ至ナリ。子息ヲ天守ヨリ飛セシモ、敵寄来以前ニ落サンニシカシ。去トモ、常々民ヲ苦メタル故、地下背テ敵シケルニ依テ、可落ヤウモナクシテ、覚アリケルカ。久秀勇有トイヘトモ、正智ニアラス。依テ一旦立身アリトイヘトモ、栄花ヲ子孫ニ不残、大悪人ノ名残リケルモノカ。此旨思量仕給へ。

①ヌ（大・金）。②旨（大・金）。③添（大・金）。④ヲ（大・金）⑤三本とも「タリ云リ」であるが、「タリト云リ」となるべきか。⑥ヌ（大・金）。

一

天正年中長久手合戦ノ最初、織田信雄公ノ家老市橋下総守・津川玄蕃允・岡田長門守、浅井田宮丸、右ノ四人ヲ秀吉公被成御呼、日来信雄公御心根悪キニ付、御持ノ尾州・濃州御取返可被成間、各此方ヘ可通志由、誓紙仕候ヘ。不仕ニ於テハ、其坐ヲ立セ間布由ナリ。故ニ四人トモニ誓紙シテ皈ヌ。其内、市橋下総守ハ信雄公ノ御前出テ云ケルハ、「秀吉如此。権付ニ誓紙仕ラセ候間、御分別被遊侍レ」ト申上ル。依之　権現様ヲ被成御頼ケル故ニ、長久手合戦御加勢アリシトナリ。右ノ家老津川玄蕃允・岡田長門

守・浅井多宮丸三人ハ御成敗アル。此三人ノ内誰トハ不覚、土方勘兵衛ト云モノ討手ニテ討シニ、討タル、者ノ常々云シハ、「我自然ノ事モ有テ、被仰付ン者ハ其方ナラテハ不覚。脇指ハ信国ニテ二尺一寸アル大物切ナリ。鞘ヲサヘ離レタランニハ、活テハ置マシキ」ト常々廣言セシトナリ。去ハ、討レシ時、中脇指ヲ以テ、脇ノ下ヨリ肩先ヘ笑①通シ、ヒタクリニクル。彼者クラレナカラ、畳七・八畳ノメリ行ヲ、信雄公御刀ヲ抜セ給ヒ、放セ、切ント被仰ケルニ、勘兵衛云ヤウ、「大事ノ者テ候。某トモニ被遊侍レ」ト云テ、不放。良有テ、彼者弱リ事絶タリトミヘケルマヽ、立退ントセシ所ニ、信国ノ二尺一寸ノ脇指ヲノメリナカラ抜放テ、「世悴目」ト云テ拂ヒシニ、立退ケル勘兵衛カ額ノ皮ニ、切先ハツレニ当テ、少シ血流シニ、誠以危カリシ事共ナリ。然トモ、肝ノ来②ヲ突トウサレタル事ナレハ、其侭事終リケルト云々。

誠ニ市橋下総守ハ、忠臣・義士ト可謂者欤。去ハ、武士ハ少モ不義ニハ同ス間敷モノナレトモ、此ノ如ヲ権付ニ誓紙カヽセヌルトキハ、否トイヘハ一命ヲ失フ。一命ヲ失フテハ誰有テ此事ヲ注進スヘキ。死スルハ非忠ト思テ書タルナルヘシ。是コソ命ヲ全フシテ、君ニ忠ヲ尽ト云ナルヘシ。其証拠ニ、立皈テ其旨直ニ諫言シタリ。臆シテ誓紙セハ、武ニハ有ヘカラス。是ハ知アリ勇アリ、勿論忠義アリト云ヘシ。残三人ハ無忠義男タルヘシ。故ニ、天ノ為ニ罰セラレタリト見ヘタリ。又勘兵衛カ不放シテ、某トモニ被遊侍レト云シコト、殊勝千万ナリ。好云分ナリト、今ノ世マテ申伝ヘ侍ル。又脇ノ下ヨリ肩先ヘ突通サレテクラレナカラ、七・八畳ノメリ行内ニ、脇指ヲ抜放テ死タル体ニモテナシテ、立退ケル所ヲ言葉ヲ放テ払ヒシコト、剛強第一ナル男ナリ。誰々モ武士タランモノハ、如此不成迄モ、剛強ニスヘキト、日夜朝暮ニ願ヒ求メンモノナリ。願テモ、如此ノ儀ハ難成カラン。増テ心ニ不懸死ナンスルトキハ、能一言モ被云間敷モノナリ。此旨ヲモフテ常々修行仕給ヘ。

①突（大・金）。②束（大・金）。

一

大坂冬陣ノ時分、山内対馬守殿・蜂須賀阿波守殿責口ハ仙場ニテ有シニ、城中ヨリ橋トモヲヤキ落シ、農人橋一ツヲ残シ置。此橋ヨリ阿波守ヘ夜討ヲモ討ケルトナリ。初ハ農人橋ノ前、対馬守殿ノ陣所ニテ有リシトナリ。対馬守殿足軽大将、鯰江次郎左衛門ト云者アリ。此者後ニ子息語リケルハ、「敵農人橋斗一ツ残置シコトハ、定テ敵出ント云コトナルヘシ。油断スヘカラス。必定敵出ント思ヒ居タル所ニ、其名字ハ不覚、何ノ加右衛門ト云シモノ、小屋近隣ナリケルカ、夜咄ニ来テ有ケルカ、「敵出タリ」ト云ヒケル侭、足軽ヲ引連出ケルニ、彼加右衛門、次郎左衛門カ門トニ在ケル竹棹ヲ追取、二・三間先ニスヽミ行ケル。橋ノ辺ニ至テ、「此辺足場ヨシ」ト云テ、次郎左衛門足軽ヲ伏セ、火縄ヲ隠サセ、敵寄来ケルカト待居タリケルニ、加右衛門竹棹ヲ二・三度クリ出シ、鎗ノコトク打振テ同伏テアリ。加右衛門カ僕従跡ヨリ鎗ヲ持テ来ケレハ、右ノ竹棹ヲ捨テ鎗ヲ取リヌ。然トモ、敵出サレハ、足軽ヲ引テ小屋ニ皈リヌ。其後、次郎左衛門、加右衛門ニ云ケルハ、「貴殿、先程持給ヒシハ棹ニテ有シヤウニ見タリ。喩ヒ敵ヲ討取給トモ、鎗トハ不可申、棹トコソ可申」ト戯ケルニ、「イヤ〳〵鎗ニテ侍リシ」ト云テ、棹ナリト云ハス。何時油断シタランニ於テハ、加右衛門ニハ先ヲセラレン侭、油断スヘカラス。彼者ハ逸物ナリ」ト語リシト云々。

誠ニ此加右衛門ハ、竹棹ヲ取タリトモ敵出ハ突倒シ、討取ヘキコト必セリ。勇気有テ心利タル逸物ト云ヘシ。去ハ、昔常州真壁道無ノ家来、桜井大隅ト云者、フト小脇指斗ニテ町ヘ出タリケルニ、先ヨリ「狼藉者ヨ遁スナ」ト云テ追懸来ル。見レハ血刀打振走リ来ル。大隅ハ少モ不騒、小サ刀ヲ抜テ、町屋ノ内チニ立タリケル。酒バヤシノ竹ノ縄ヲ切テ取リ、狼藉者ノ前ヘ突出シケレハ、抜設ケタル刀ナレハ、筋違ニズント切テ落シケル。其刀ヲ引上ザルニ、

酒林ノ竹ニテ真中程ヲ突通シケルニ依テ、突殺シケルトナリ。然トモ此大隅ハ、鎗兵法ノ上手ニテ有シホトニ、世人ニハ替ヘキ欤。去ハ心利タル者ハ、道具ノ善悪ニハ依間敷モノナリ。然トモ、此両人ノ仕方、至極ノ善ニハアルヘカラス。其故ハ、加右衛門、近辺ニテモアレ、陣中ニテ夜咄ニ行コト油断ナリ。陣中ニ於テハ、夜遊行スルコトハ嫌フ者也。小屋ニ居トモ、夜討有ラハ早ク物具シテ一番ニ出ル如ク、心懸テ居ヘキモノナリ。自然所用有テ行事アラハ、物具シテ得道具ヲ持、夜討有ハ、直ニ出合如クシテ行ヘシ。扨其事果ナバ、疾ク可皈事勿論ナリ。加右衛門此失有シニ依テ、不被云戯レニモ遇シモノナリ。又大隅カ仕ヤウモ、至極ノ善ニハ有ヘカラス。去ハ、寛永年中、常州水戸ニテ、追手ノ前ニ於テ小脇指ニテ狼藉者ヲ討留タルモノ有シニ、水戸中納言殿ノ御意有シハ、「彼者刀ニテ討留タランニハ手柄トモ云ヘシ。小脇指斗ニテ茫然布（ウカ〳〵シク）追手ノ前ヘ出タルハ、先ツ以テ油断者ノ不心懸ト云ヘキ者ナリ。危勝負ナリ。追放ニモスベキ破家者ナレトモ、免許シ侍ル。向後家中如此ノ儀有ラハ、可為追放」トナリ。其以後、一両年ヲ経テ、何トナク加増ヲ給ハリシト聞伝侍ル。是ハ定テ家中ノ油断ヲ誡ン為ナルヘシ。是ヲ以テヲモフ時ハ、至極ノ善ニハ有ヘカラス。無拠所ニ於テハ、右ノ加右衛門、大隅ナドカコトクスヘキコト、勿論ナリ。此旨思量仕給ヘ。

一　寛文十余年、因幡・伯耆ノ守護、松平相模守殿家来ニ、琢磨八太夫ト云者、初テ江戸ヘ下向シ、使役相勤ケルニ、当府須田丁辺ニテ、末①不案内ナルニ依テ、若党ヲ走ラセ先様ノ屋敷ヲ問セケルニ、彼若党、御旗本奥近習衆、野々山瀬兵エ殿、馬上ニテ通リ給ヒケル。先供ヲ割タルトテ、摘テ成敗シテ通リ給ヒシ。後、琢磨モ其所ニ行着、是ヲ見テ驚キ、辻番ノ者ニ様子ヲ相尋ケルニ、右ノ趣ヲ語ル。扨瀬兵衛殿ハ何方ヘ通リ給ヒシト聞届ケ、使者ニ行所、頓テ近所ナルニ依テ、其玄関ニ至、口上之趣ヲ述テ、御返事相模守方ヘ被仰遣被下候ヘ。難去儀有テ直ニ罷越侍ルト云捨、鎗ノ鞘ヲ脱シ、馬ニ鞭打テ追駈行ニ〔又或説ニ、歩行ニテ鎗ノ穂首ヲ取テ鎗ノ柄ヲ跡ニ引スリ、左ノ手ニテ群集ヲヲシワケ〳〵追カケン②ト云リ〕、無程瀬兵衛殿ヲ先掛、「瀬兵衛殿ニテ侍ラハ申入ヘキ儀ノ侍ル。御待候ヘ」ト云テ追掛行ニ、瀬兵衛殿ハ不聞体ニモテナシ、馬ヲ早メテ北条新蔵殿屋敷ヘ逃込給フ。琢磨モ跡ヨリ追テ乗着、新蔵殿門前ニテ馬ヨリ下リ、新蔵殿家頼ヲ呼出シ云ケルハ、「野々山瀬兵衛殿是ニ御入候。御出候ヘ。可申入子細侍ル」由云ケレハ、瀬兵衛殿ハ是ニハ御入無之由ヲ云ケレトモ、「イヤ唯今、後ヨリ是ヘ御入ヲ見候テ参リ侍ルマ〻、是非々々御出候様御申被下侍レ。御門ノ内ヘ入候ハ慮外ト存シ、入不侍。瀬兵衛殿御皈リ可有。其節迄是ニ罷有侍ル」ト云テ、新蔵殿門ノ向ニ、狭箱ニ腰ヲ掛、鎗ノ鞘ヲ脱シ膝ノ上ニ置キ、瀬兵衛殿出給ハ〻、可討果覚悟ニテ在シ。新蔵殿直ニ御出有テ宣ケルハ、「其方存念モ道理至極セリ。乍去被皈候ヘ。相模守殿ヘハ委細我等可為物語」ト也。八太夫云ケルハ、「御門内ヘハ慮外ト存シ入不侍。平生コノ御旗本ヘハ恐モ侍ル。此段ニ罷成候上ハ覚悟仕参リ侍ル。瀬兵衛殿御皈無之事ハ有間敷。其節委細ヲ承届可侍」ト云テ不立去。新蔵殿モ可為ヤウナクシテ、相模守殿ヘ如此ノ儀侍ル。何トソ御呼皈シ候ヒテ給リ候ヘトナリ。是ニ依テ、大目付役ノ者ヲ以テ、「先皈リ候ヘ。兎角始終ノ儀ハ重テノ事タルヘシ」ト、御下知有シニ依テ、相模守殿ノ下知ヲ可為違背様ナクシテ皈リヌ。故ニ野々山瀬兵衛殿ハ、此恥辱ニ依テ自害アリシト云リ。又ハ、一類衆寄合テ、指殺シタルト云沙汰モアリケル。依之相模守殿、「琢磨八太夫如何可仕」ト、御老中迄伺給フ所ニ、「其侭被召仕レ。不苦」トナリ。此故ニ、瀬兵衛殿ノ一類衆、伺ヒ討事モコソ有ントテ、騎馬・足軽大勢附給ヒ、用心キビシクシテ因州ヘ上セ給ヒン③トナリ。

誠以、此八太夫不慮ノ難ニ遇タレトモ、勇気有男ニテ、先我役儀

ヲ麁畧ニセス使者ヲ勤、扨瀬兵衛殿ヲ追掛、新蔵殿宅へ逃込給フニ、御出候ヘト静ニ事ヲ述テ、思誥深ク、相模守殿下知ヲ重ンシテ皈リシコト、始終共ニ言語同断ノ儀ト云ヘキモノ欤。世ノ中ノ癡トシテ、勇ナルハハヤリ過テ、不閑静ナルハ勇義不足スルコト多。アハレ何事モ如此セマホシキモノナリ。然トモ、八太夫使者役ヲ勤シコトハ、近所トハ申ナカラ三十才ヨリ内ノ男ナラハ、不勤トモアレカシ。若者ノ余リ静リ過タルモ、時ニ村④応セスシテ如何アラン。然トモ、以後ニ可達鬱憤道理アラハ、静ナルニハシカス。此旨ヨク〳〵勘弁仕御坐アレ。

①未（大）。②シ（大・金）。③シ（大・金）。④相（大・金）。

一 寛文ノ比、江戸御旗本御書院番頭、八木兵助殿ト云シ人、於殿中①我組中ノ所用ノ儀ヲ書付、御目付横田甚右衛門殿へ被為見ケルニ、少間隔リ居給ヒケルユヘ投出被遣ケルニ、甚右衛門殿被申ケルハ、「被致持参候へ」トナリ。兵助殿兎角ヲ不論取テ被遣ケルニ、被致披見、其マヽ、兵助殿方へ投返サレケレトモ、兵助殿憤深ク被思ケレトモ、殿中ナルニ依テ、兎角ノ儀ヲ不云、堪忍被致、懐ニ納メテ去給ヒヌ。扨、甚右衛門殿宿所ニ被皈ケル節、兵助殿被参、用ノ儀有之間、対面スヘキ由ニテ呼出、「先程殿中ニテノ儀ヲハ覚給フカ」ト云テ、一尺六寸有ケル脇指ヲ以テ即時ニ切伏セ、留ヲ指給フ所ニ、甚右衛門殿家来多勢出合、則兵助殿ヲモ討留タリ。此由兵助殿宿所ヘモ相聞ヘケレハ、兵助殿子息何某殿、裸背馬ニ乗テ馳着給フ所ニ、横田甚右衛門殿親父横田次郎兵衛殿出向ヒ宣ヒケルハ、「御親父兵助殿、世悴甚右衛門ト喧嘩ニテ、甚右衛門ヲ討給フニ依テ、家頼トモ出合、兵助殿ヲモ討留候間、左ヤウ御心得御皈リ候へ」トナリ。八木ノ何某殿被申ケルハ、偽ニテハ有間敷ナレトモ、左有ハ甚右衛門殿死骸ヲ御見セ候へ。左ナクシテハ難立去由ヲ被申ケレハ、次郎兵衛殿、「如何ニモ尤ニテ侍ル。見セ可申間、是へ御通リ御覧候へ」トテ、死骸ヲ見セ給ヒケレハ、此上ハ兎角ヲ可申様ナシトテ、皈宅セラレケルト云々。去ハ、此甚右衛門殿、武功ノ家ニ生レ給フトイヘトモ驕リ給ヒ、人ヲ慢リ給ヒ、譬ヒ兵助殿ノ投出給フハ不礼ニモ仕給ヒ、夫ヲ糺給ヒナカラ、其返報ニ又股②返給フコト、兎角ヲ可云ヤウナシ。景行録ノ言葉ニモ「己ヲ屈スル者ハヨク其モロ〳〵ニ交リ、勝事ヲ好ム者ハ敵ニ過」ト宣ヒシ金言、今以可嗜事ナリ。甚右衛門殿、此心根故ニコソ、兵助殿討果ス覚悟ニテ被参ケルニ知ラス、油断シテ手モナク被討給フ者也。兵助殿ハ殿中ニテハ其色ヲモ不顕退出シテ、宿所ニ至テ討果シタマフコト、義アリ、信アリ、忠アリ。尤勇アリト可云者ナリ。次ニ八木ノ何某殿親、兵助殿ノ喧嘩ヲ聞テ裸背馬ニテ馳着給フ処ニ、次郎兵衛殿出向給ヒ、右之段々宣ヒシ事、流石武功ノ家ヲ継給ヒシ人ナリ。老（ヲトナシマヽ）シヤカニ覚侍ル。又八木ノ何某殿、親ノ兵助殿討レ給フト聞テ裸背馬ニテ馳付ケ給フナラハ、定テ可討果覚悟ニテ被参ツラン。人（本ノマヽ）ノ次郎兵衛殿ノ宣ヒケル云ヒ分ヲ聞届給ヒ、「左アラハ甚右衛門ノ死骸ヲ見セ給ヒ、於不見テハエコソ皈ルマシ」ト云テ、死骸ヲ見届被皈ケルコト、神妙ナル仕形、兎角ヲ云ヘキヤウナシ。カヤウノコトハ覚テモ学ヒカタク、習テモ難習者欤。羨敷者ナリ。此旨ヨク〳〵了得仕給へ。

①中（大・金）。②投（大・金）。

一 寛文ノ比、牧野佐渡守殿、京都所司代役ニテ御坐セシニ、摂州高槻ノ近辺、服部村ト云処モ佐渡守殿領地ニテ有シニ、其所ニ高屋ノ無益、同九郎兵衛ト云シ牢人在ケルカ、此者本ハ水戸中納言殿御家頼ニテ、知行千石余給テ有シ。時ニ士ハ行末難計事ナリト云リ。未五十石余ノ名田（みょうでん）ヲ買調テ、右ノ服部村ノ大庄屋ハ無益胤替リノ兄弟ナリケル故、数年預置ケルニ、無益不慮ニ牢人シケル間、彼ノ名田ヲ可返由再三云ケレトモ不返。依之、佐渡守殿知行方支配人、上田弥右衛門ト云者ニ訴ケレトモ、彼大庄ヤ常々佐渡

守殿奉行頭人・横目等ニ至マテ賍（マイナヒ）ヲ尽テ頼ケルニ依テ、無益兄弟ノ訴一円ニ不聞入、却テ無益カ負ニナリタリ。故ニ無益立腹シテ、「此上ハ可為様ナシ。佐渡守殿コソ吾相手ヨ」ト云テ、我屋敷ニ取コモリ、「討手ヲヲ①下シ給ヘ。於無左ハ服部村ヲ焼討ニスヘキ」由、札ニ書テ立置ケルトカヤ。扨、無益ハ能筆学者ナリケル故、手習子数多有ケルカ、彼ノ文庫机ヲコト〳〵ク封ヲ付テ、門外ヘ投出ケルトカヤ。其節上田弥右衛門、無益カ家三町斗脇マテ来テ、雪隠ノカケヨリ鉄炮ヲ二ツ放懸テ、京都ニ皈リケルトナリ。翼日出家ヲ二・三人頼、アツカヒノ体ニ事ヨセテ同心ヲ跡ニ添テ遣ケルニ、無益ハ着込ノ上ニ刀・脇指ヲ指テ在リシカ、余リ事ヤウニヤ思ケン、上ニ小夜ノ物ヲ着隠シテ出家ニ対面セン②トカヤ。舎弟ノ九郎兵衛ハ、其時半弓ヲ持、閤（セド）ニ出テ遠見ヲセシ所ニ、出家ノアトニ継テ同心共二・三人忍ヨリケル所ヲ、半弓ニテ射ケルニ、首ノ骨ヲ被射テ周章フタメク所ヲ、二ノ矢ヲ以テ真只中ヲ射抜ケル侭、両人即時ニ亡失セリ。無益モ鉄炮ニテ一人打殺ケルトナリ。其後ハ「雑人原ヲハ討ナ。罪作リニ」ト云テ、不討トナリ。依之次ノ日、鉄炮三十挺、弓三十挺、侍同心六人討手トシテ下向ス。高槻ノ永井日向守殿モ「近隣ノ事也」ト云テ、足軽三十人、侍二人遠巻ス。京都ヨリ討手ノ者トモハ、服部村十余町前ヨリ火縄ニ火ヲ付、押寄ケルトカヤ。故ニ弟ノ九郎兵衛、年来召仕ヒケル妾有ケルヲモ暇ヲ取ラセ、何方ヘモ可参由達テ云ケレトモ、彼女云ケルヤウ、「此節ニ及テ何国ヘカ可参。同クハ被掛御手候ヘ」ト云テ不去。依之テ母ト彼女ヲ指殺ス。兄弟モ此愁ニ忘却シケルニヤ、念仏ナト唱ヘケル内ニ、討手ノ者共忍寄テ、無益カ屋敷ハ表ハ煉塀ニテ八・九間斗有。裏門ハ生垣ニテ二十間余有シ。生垣ニ矢間ヲ切テ、弓・鉄炮ヲ伏、同心共ハ裏ノ前ニ毛氈ヲ敷、茶弁当ナト置テ、緩々トシテ在シ時ニ、又討手ノ足軽一人忍寄テ家ニ火ヲ掛タリ。火ヲ付ラレテ兄弟ノ者トモ、無益ハ着込ニ白帷子ヲ着シ、上ニ十徳ヲ着、玉タスキヲ掛テ鎗ヲ持。舎弟九郎兵衛ハ半弓ヲ持テ出タリ。表ノ門外ニハ雑人ノミ在ヲ見テ、遠キ裏門ヘ出タリ。門ノ片扉ヲ開テ「弥右衛門参」ト訇（ののしり）テ突テ出ントシケニ③、近所ノ庄屋薙刀ヲ持テ、門ノ脇ニ隠居テ礑（はたと）ト切ニ、「比興スルナ」ト云テ、鎗ノ柄ニテ留。又片扉ヲ開テ突テ掛ル同心トモ、二十間斗追立ラレヌ。舎弟九郎兵衛ハ半弓上手ニテ、当④ハ五間・七間ニテ雀ヲ射ルニ、三ツニ二ツハ不外ト云リ。然トモ運ヤ尽タリケン、失⑤ヲソロ引テカヽリケルニ、矢ヲ引過テ、手首ヨリ弓ノ内竹ニ射付タリ。又引直シテ放ケル所ニ、腰ノアタリヲ鉄炮ニテ被討倒レケルカ、起直リ矢ヲツカヒテ引ケル所ニ又鉄炮ニテ小鼻ノ所ヲ打抜レテ、倒タリ。兄ノ無益ハ裏門迄二十間余ニ鉄炮ヲ伏、弓ヲ伏テ射ケルニ、一ツモ不当。同心共ニ突テカヽリケルニ、同心モ漸鎗ヲ取テ無益トセリ合ケル。無益ノ方ハ少地下リナリケル故カ、門際ヘ引ケルニ、舎弟九郎兵衛カ倒ルヲ見ケルトテ、溝堀ヘ倒入ケルカ、吾指タル刀邪魔ニナリ不被立。カヽル所ヲ鎗七・八本ニテ突ク。被突ナカラ一尺六寸有ケル備前清光ノ脇指ヲ抜テ、鎗三本迄切折ケル。然ル所ヲ薙刀ヲ以テ頬先ヲ切、其上次第ニ折重テ被討ヌ。舎弟九郎兵衛、最前手負テ伏タリケルニ、佐渡守殿家頼日下縫（クサカ）殿右衛門ト云者ノ子何某ト云テ、歳二十斗ナルモノ、茫然ト首ヲ捕ント立寄ケルニ、九郎兵衛起様ニ脇指ヲ抜テ袈裟ノ被於計⑥ニ切付タリ。故、九郎兵衛、彼者、諸共ニ死ス。其後、無益・九郎兵衛カ首ヲ獄門ニ掛タリケルニ、札ニ、「対佐渡守依構兵具、行断罪者ナリ」ト被書シトカヤ。三日梟ケル以後、出家共申請葬ケルニ、其時迄無益カ色、少モ不変シテ在リシ。見ル人皆不流涙ト云コトナシト云々。

誠ニ、智勇ノ武士モ時ヲ怒ニ被妨テハ、命ヲ失ヒ過ツ事、古今トモニ数多有之。去ハ無益、鎗上手ナル故ニ、弓・鉄炮ニモ不当者ナラン歟。其上、鎗付ラレテ三本迄鎗ヲ切折ケルコト、剛勢ニナクンハ不可成。武士トシテ誰カ是ヲ不羨。又首ニ成テモ色ノ不変事ハ、武ノ冥加ナリ。人力ノ及フ所ニアラス。常々天運ヲ可祈事

ナリ。舎弟九郎兵衛ハ鉄炮ニハ当リケレトモ、人ヲ数多討取タリ。殊ニ深手負テ最期ニ及ヒ、人ヲ討事剛勢ナル故ナリ。弱兵争如（イカテカ）此ノ働ヲセンヤ。去ハ、カヽル時節ニ臨テハ、怒ヲ静メテヨク〳〵得失道理ヲ分別シ、事理ヲ可取行モノ也。五十余石ノ名田ハ軽ク、高屋兄弟ハ金鉄ノ勇士ナレハ世ノ重宝ナリ。今此物語ヲ聞テ染々ト惜ク思ヒ侍ル。却テ智眼ノ将、希レ世ル事ヲ愁ルモノナリ。彼ノ兄弟モ怒ヲ止メテ、時節ヲ待ケシ⑦ハホシキモノナリ。又又無益カ家ニ火ヲ掛シ足軽、米十石ノ加恩有リシトカヤ。又、薙刀ヲ持テ無益ヲ討シ庄屋モ、褒美トシテ白銀五枚給ヒシトナリ。能働ナリ。

①「討手ヲ」（大）。②シ（大・金）。③三本ともに「シケニ」であるが、「シケルニ」となるべきか。④常（大・金）。⑤矢（大・金）。⑥底本と同じ表記であるが、右傍に「本ノマヽ」（大・金）。⑦「ケシ」を「テミ」（大）「ケミ」（金）。

一

元和・寛永ノ比、伴八弥ト云モノ、武州江戸ニ牢人ニテ在シ。此者元来大気ニシテ道達者ナリ。人々、「彼方此方ヘ有付給ヘ。肝剪スヘシ」トイヘハ、「其ハ如何程ノ大名ソ」ト問ニ、「喩ハ五万石、七万石」ト云ヘハ、八弥カ云ヤウ、「皆被下テ五万石、七万石ナリ」ト云テ不住。「兎角我ラハ知行ニハ不構、大国ヲ領シ給フ人ナラハ有付ヘシ」ト云テ有レ①。或人、「加賀肥前守殿ヘ出給フ間敷ヤ」トイヘハ、「其コソ望ム所ナレ。肝剪テ給ヘ」ト云。「歩行奉公ニモ有付給フヘキヤ」ト云ヘハ、「中々如何様ニテモ不苦」ト云テ、歩行奉公ニ有付タリ。扨或時、加州ヨリ江戸ヘ時付ノ早使ニ被仰付、江戸ヘ行ケルニ、信濃路ニテ道連三人出来タリ。彼者トモ、江戸ヘ行由ニテ一日連立タリ。其夜、或宿ニ泊リ、少シ体ヲ②下ルヘシト云テ宿ヲ借、亭主ニ「用心ハヨキカ」ト問ニ、「ヨシ」ト答フ。折節夏ノ比ニテ、帯紐マテ脱テ体③シ。寐入タル内ニ、彼道連三人ハ、八弥刀・脇指、着類マテ取テ、何国トモ不知逐電ス。八弥跡ニテ目覚テ驚キ、亭主ニ「連三人ノ者ハ」ト問ニ、「今一時斗先ニ旅立給フ。最早道二二④里ハ行ヘシ」ト云。「左有ハ此状箱ヲ江戸肥前守屋敷ハ⑤可届。於然ハ金銀ハ望次第タルヘシ。扨今ノ三人ハ何方ヘカ行ツル」ト問ニ、此方ヘ行ツル由ヲ云ケレハ、八弥赤裸ニテ追テ行ニ、道三里カ内ニテ追付タリ。「扨今ノ刀・脇着⑥、衣類ヲ返テ給ヘ」ト云ヘハ、我々ハ不取由ヲ云々。八弥、「左ハ云セ間敷。是非々々返セ」ト云ヘハ、「悪キ奴哉」ト云テ、刀ヲ抜テ取テ返テ追ハ逃去、又彼三人行ハ八弥追駈テ、「是非々々返テ給ヘ」ト云。又返テ追ヘハ八弥ハ逃ス⑦。三人行ハ八弥追駈テ「平ニ返テ給ヘ」ト云ニ、夜モ早頓テ明ナン体ニ見ヘケレハ、盗人トモヽ迷惑シテケルカ、「六ケ敷奴哉。左有ハ可返。近ク来ヨ」ト云ニ、八弥、「夫ニ置テ給ヘ。各遠ク退スハ得取事ナラス」ト云。「左有ハ爰ニ置テ取セヨ」トテ、衣類・刀・脇指下ニ置テ遠ク退ク。其時、八弥立寄、着物ヲ着シ刀・脇指ヲ腰ニ指テ云ヤウ、「只今迄赤裸ニテ大小無之タニ可逃トハ不思。殊更今ハ少モ遣間敷」ト云テ追駈、三人ナカラ三所ニテ切伏セヌ。其後、八弥ハ彼旅宿ニ皈、其亭主ニ云ヤウ、「我時付ノ早使ニ行者ナルカ、最早時延引スヘシ。如此ノ様子ニテ遅滞セシ由、手形ヲクレヨ」ト云ニ、亭主、「扨々御手柄申様ナシ。如何ニモ手形ヲ可進」ト云テ、「右ノ段々毛頭偽無之。何時モ証人ニ可罷出」由一筆ヲ執テ江戸ヘ下リ、加州ニ皈ル。依之、此様子委細肥前守殿ヘ達御耳ニ、彼地被為穿鑿ケルニ、毛頭無相違故ニ、初テ知行上⑧百石被下ケルトナリ。是ヨリ肥前守殿モ能被思召、奉公ニモ精ヲ出シケルマヽ、後ニハ五千石ノ所領ヲ被下ケルトカヤ。其子孫所領伝々シテ、今ニ伴八弥ト名乗テ加州ニ在ト云々。誠ニ此者、勝レタル器量人ト云ヘシ。此八弥カコトク刀・脇指・衣類迄被剝取ナハ、当惑シテ追掛ヌル思案ハ出マシキモノナリ。然ルニヨク追掛タルモノナリ。扨又此思按出来テ追付タリトモ、積（セイ）テハ盗人ニ可被切。盗人取テ返シケルニ能逃タリ。ニケテシタ

ルク會尺（あいしらい）テ刀・脇指ヲ取返、追カケテ三人トモ切伏タル機転、絶言語モノナリ。此事ヲ聞テ我々モ追カケ行ヘシ。去ナカラ、遠⑨者ニアラスンハ本意ヲ達シカタシ。道達者ホト羨シキモノハアラシ。此八弥ハ智勇有テ道達者ナルコト衆ニ勝レタル所ナリ。故ニ以後ニ立身シテ、家ヲ興ケル事尤ナリ。去ラハ、善クモ悪クモ手本有事ハ仕善モノナリ。古賢モ宣ヒシ。「武士ハ第一ニ智、第二ニ勇、第三ニ仁」。此徳ヲ少ツヽ成トモ可求行モノナリ。勇ハ武ノ家ニモ⑩レテ無者ハ有ヘカラス。万一武家ニ生テ吾心ヲ穿鑿スルニ、勇ナクンハ一向ニ武ヲ止テ、農工商トモ可成事、勿論ナリ。去ハ、第一ニ智ヲ云コト。智アレハ善悪ヲ分別ス。善悪ヲ分別スレハ、女童、坊主等ニ至マテ、臨節軽死。女童坊主等ニ可劣ヤ。然ラハ、智タニアラハ勇ハ求安カランモノ歟。仁ハ智勇タニアラハ、自ラ可出来者歟。勇有テモ無智時ハ、勇ニ過テ不及有。故ニ勇不足スルコト多シ。勇過スレハ打砕ル事多シ。此旨思量仕給へ。

①シ（大・金）。②休テ（大・金）。③休（大・金）。④三（大）。⑤へ（大・金）。⑥三本とも「着」とするが、「差」とあるべきか。⑦ヌ（大・金）。⑧五（大・金）。⑨達（大・金）。⑩生（大・金）。